

## 昔も、今も



イラスト・岡林玲生

石川県金沢市出身の私にとって、電車といえば「浅電」だ。

正式には北陸鉄道浅野川線というのだが、「浅電」の方が馴染み深い。そして、私くらいの年代なら、その名を聞くと必ず潮の匂いを思い出すはずだ。

なぜなら、浅電は内灘海岸に繋がっていて、子供の頃の夏の一大イベント、海水浴に欠かせない電車だったからだ。

まだ車を持つ家は少なく、多くの家族連れが、弁当や水筒や浮き輪を持って浅電に乗り、内灘海岸の海水浴場に向かった。

乗車時間は三十分もかからなかったと記憶している。内灘の駅は海のすぐ近くにあり、波の音ははっきりと聞こえる。早く泳ぎたくて、駅員さんに切符を渡す

のももどかしかったものだ。

水着はいつも家から着ていたので、浜茶屋に着くと、その場で服を脱いでしまう。熱く焼けた砂浜を飛び跳ねながら波打ち際まで走り、勢いをつけたまま海に飛び込み、後はもうただひたすら遊び呆けた。

昼になると、浜茶屋に呼び戻される。荷物番をしていた母が弁当を広げ、風に飛ばされた砂で少しじりじりするおにぎりや卵焼きを、家族で食べた。スイカの汁や種を花柄のビニール莫蓆（もじ）にこぼして叱られたのもよく覚えている。食べたら、また海に飛び込んでゆく。

帰りの電車は、いつも床が砂だらけだった。電車の振動が心地よく、遊び疲れてぐったりした身体を母や父に預けて

眠りこけた。波の気配が身体に残っていて、眠っている間もずっと泳いでいるようだった。終点の金沢駅に着いても、眠りから醒めることができず、結局、いつも父に背負われて家まで帰った。

あの頃、両親は幾つだったのだろうか。四十代後半といったところか。

もう両親はいないが、金沢に帰省して「浅電」を見ると、あの頃の思い出が鮮明に蘇る。

さて、もうひとつ、最近馴染みになっている電車がある。

「しなの鉄道」。

車両は銀色に近いグレーで、両端は赤、裾に四本の白いラインが入った三両編成の電車だ。軽井沢に住んでいるので、しょっちゅう目にしてはいる。

実はまだ乗ったことはないのだが、よく夕食に出かけるお店のすぐ前に線路があって、食事をしながら大きなガラス窓から走っている電車を眺めることができる。

夕時なので、多くは家路に向かう乗客を乗せているのだろう。

仕事柄、日中ずっと家にいる私にとって、一日の終わりが実感できない日もあつて、そんな時でも、その店から電車を眺めていると、乗客の気持ちになって、ああ今日も一日終わった、とホッとします。

乗らなくても、私にとっても家路に向かう大切な電車なのである。



文・唯川 恵  
Kei YUIKAWA

石川県金沢市生まれ。1984年「海色の午後」でコバルト・ノベル大賞を受賞し、作家デビュー。2002年『肩ごしの恋人』で直木賞、2008年『愛に似たもの』で柴田練三郎賞を受賞。『とける、とろける』『とけるセシルのもくろみ』『雨心中』など著書多数。近著に『ティティスの逆鱗』がある。